

はたちの夢

新成人を代表して、小鹿山知実さん、松本紘明さん、猪狩健司さんよりそれぞれ新成人としての決意と抱負を述べていただきましたので、ここに掲載します。

小鹿山 知実さん

私達は生まれてから今まで、たくさんの方々に見守られてきました。小さい頃は家族に守られ、学校に上がってからは多くの友達や先生方、地域の方々から育てられてきました。20歳になるまでに何と多くの人達の助けを借りてきた事でしょう。本当であれば今日ここで、その思いを込めて、私達の方からお礼を申し上げなければならぬのですが、このように盛大に門出を祝っていただき、とても感謝しています。また、震災の混乱を経て今こうして懐かしい友達と広野の地で成人式を迎えられた幸せを本当に有り難く思います。

なってしまう友人もいます。3月1日に卒業式を行った高校の体育館は遺体の安置所になりました。町のシンボルでもあったJヴィレッジが自衛隊の基地のような様相になってしまいました。双葉郡の多くの町は震災の後始末すら充分にできていない状態です。私達の故郷「ふくしま」が「チェルノブイリ」と同義語のように扱われる現実には悲しみを感じるのには私だけではないと思います。今、私に何ができるのか？自分の無力さを感じました。

ある時、テレビで仮設住宅にお住いの広野の方が、父について「先生の顔を見ると元気になる。」と話しているのを見ました。家では家族に「細かい事ばかり言う」とうるさがられている父が、誰かの支えになっ

ていることに驚き、父は医師であることで、何かをしたいという気持ちを形に出たのかもしれないと考えました。これまでも父のよくな仕事をしたいと考えていましたが、この時にこの思いが強くなりました。

そんな中、南相馬市のある産婦人科医の事を知りました。御自身が癌に侵されながら、地域のために今も尽力されているという話でした。震災後、ずっと地元に残り、地元での出産と子育てを選んだお母さん方のために、放射線についての判り易い説明をされたり、実際に除染の手伝いをなさっているそうです。除染の効果が十分でなかった場合には、妊婦さんの部屋に放射線を遮蔽するためのカーテンの設置までなされたとも聞きました。また、市内の医療機関が軒並み休診となっているなかで、産



婦人科以外の患者さんの診療も断らないとのことでした。普通の人なら、自分のことで精一杯です。病気になる痛みも、我慢するのが大変な程だと思えます。それなのに、他人のことばかり心配していらっしやいます。

この先生の話を聞いた時、以前何かで耳にしたアンパンマンについての話を思い出しました。アンパンマンは誰かが空腹だと顔の一部をちぎって与えます。そのせいで自分の力が衰えてしまうと分かっています。目の前の人を見捨てることはしません。そのことについて作者の『やなせたかしさん』は「本当の正義というものは、決して、恰好の良いものではないし、そしてそのために、必ず自分も深く傷つくものです」とおっしゃっていました。私には、自分を犠牲にして

までも人のために生きるという事が信じられませんでした。この産婦人科の先生はまさにそれをなさっていました。

これまで私は漠然と自分のなりたい職業を決めていましたが、この先生の話を聞き、自分を犠牲にする覚悟も必要なのだと心が引き締まる思いがしました。今回の震災を体験したことで、改めて自分が医療の道に進む事の意義とその厳しさを実感しました。恥ずかしながら、まだ、私はその門さえくぐってはいません。でも、あきらめずにやりぬこうと心に決めました。今は無力な私も誰かのために、故郷のために力になる事が出来る、それを励みに進んでいきたいと思えます。